



2016年1月15日発行（季刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2016年1月
第105号

漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久

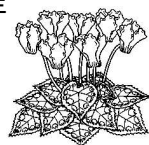


目 次

漢点字の散歩（42）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（98）（山内 薫）	10
東京漢点字例会報告とわたくしごと（木村多恵子）	16
東京漢点字学習会報告（関正子、菅野良之）	24
漢文のページ	27
ご報告とご案内	29
編集後記（木下和久）	31

点字の散歩（四十二）

岡田 健嗣



「横浜漢点字羽化の会」発足二十年

この一月三十一日で、本会は、発足二十周年を迎えます。

本会は、一九九六年の一月三十一日に、活動を開始しました。本来ならば本誌・今号を、その記念号とすべきところですが、一昨年（一九九四年）の十月に発行した号を百号記念号としましたので、今回は、取り立ててそのように位置づけることはせずに、一つの通過点と見ることにしました。

そこでこの欄をお借りして、本会のこの二十年を、振り返って見ることに致します。

☆発足以前

私は広島県・現尾道市で生まれて、学齢直前に横浜へ移りました。横浜との縁はそのころからのもので、ほぼそのまま現在に至っております。

強度の弱視者として生まれついておりましたので、

盲学校で教育を受け、文字は触読文字の点字を使用しておりました。点字について、盲学校での教育については、別の箇所でも申し上げておりますので、ここでは詳細は省略させていただきます。ただ漢字の知識については、学校教育の場では、全く教えられなかったことだけ、申し上げておきます。先生方からの特別な教育サービスはいただきませんでしたので、受けた教育は、盲学校としてはごく標準的な教育に浴してきたものと理解しております。

一九七八年から七九年にかけて、川上泰一先生の主催される通信教育を受講して、漢点字を学びました。これが私の、漢字体験の始まりです。とはいえ私が読みたい本は、漢点字訳書どころか、カナ点字での点訳書や音訳書にもなかなかおぼろげなものでした。従って漢点字で本を読むという本来の目的は、ほとんど果たし得ずにおりました。そういう状況は、基本的に現在も変わっておりません。公的には、どちらの施設も漢点字の書籍のニーズを受けるところはありません。（ただし私の現在では、本会（横浜と東京）の活動には全て参加させていただいておりますので、漢点字の触読には、大変恵まれている環境にあることは間違

いありません。然う斯うしているうちに墨田区に地歩を得ることができて、墨田区立図書館に勤務されておられる山内薫さんにお目にかかることができたのでした。この出会いが、本会の発足に結びついたのです。

当時墨田区の図書館に、徳島教育大学の末田統先生の開発された、初期のパソコンを使用した、漢点字の文書を打ち出す装置が導入されておりました。私はその装置を利用して、漢点字の資料を作っていただけないかと、山内さんにご相談してみました。山内さんは、図書館で活動しておられる点訳ボランティア・グループの方にお伝え下さって、私の希望の一端を叶えて下さいました。これが、この活動に歩を進める一歩だったのです。

☆川上先生のご逝去、そして本会の発足

私は、横浜でも同様のサービズをしていただけなものかと、横浜市社会福祉協議会や神奈川県ライトセンターに相談して、同所を拠点として活動しておられる点訳ボランティアの皆様へ声をかけていただきました。幸い手を挙げて下さる方がおられて、パソコンへ

の入力をお申し出下さいました。それは現在も活動の中心となつて下さっておられる、吉田信子さんです。しかもお話しを進めているうちに、漢点字への変換プログラムを作りましょうというお言葉が飛び出して、吉田さんのご主人のご協力を得て、たちまち実現したのでした。それによつて墨田区の図書館ばかりでなく、他の施設にある点字プリンタでの打ち出しも可能となつたのでした。とは申しまして、ここで手を挙げて下さったのは、吉田さんお一人だったのでした。残念ながら漢点字書を製作するパソコンからの入力・校正・編集・打ち出し・製本という一連のプロセスをお願いするには、余りに手狭であることは一見して分かるものでした。

折しも一九九四年から九五五年にかけて、漢点字をめぐる環境も大きく変化しつづありました。九四年の八月三十日に、漢点字の創案者である川上泰一先生がご逝去されました。漢点字を学んで漢字の世界に初めて触れる機会を得ることのできた者にとつて、このことは、寄る辺を失うような、大きな喪失感をもたらしました。その後、漢点字使用者を自称する人々の間から、川上先生のおっしゃっておられたこと、漢点字を

読むことから何かを掴んで欲しい、というお言葉が、徐々に希薄になって行くように感じているのは、私の僻目ででしょうか。

さらに九五年には年初から社会を震撼させる大きな出来事が続きました。

まず神戸を震源とする関西大震災です。一月十七日、六時過ぎに起床した私は、NHKテレビのニュースでその一報を知りました。ところがその被害の有様が詳らかになったのは、関西地方の日の出の時刻である午前七時三〇分を過ぎてのことで、それまでの一時間余りは、報道らしい報道ができないという、視聴者である私もよりも、なお報道に従事されている人々のもどかしさと焦りを、ひしひしと感じさせられる時間でした。

震災の被害、罹災された皆様のご様子やその後の復興については、ここに述べる必要はありませんが、この未曾有の、驚天動地の災害は、底の底から何かを変えたように感じられたものでした。何が・どう変わったのか審らかにしませんが、確かに何かが変わったという感は、現在も感じております。

もう一つの出来事、そうです、三月二十日の、「地下鉄サリン事件」です。

当日私は仕事をしておりましたところに、予約して下さっていたお客様が、一〇時過ぎにお見えになって、「駅に警察官が何人もいましたよ！何かあったのでしょうかね？」とおっしゃったのを聞いて、かけていた音楽をテレビに替えたことを覚えています。これも昼過ぎまで何が起こっているのか、判然しないままの時間を過ごしたものでした。この事件についてのその後のことは、皆様充分ご承知の通りです。

このようにして始まったこの年、私は、横浜で一人だけの協力者を得て、これからどうしようかと、考えたものでした。吉田さんと話し合いを重ねて、どうすればご協力いただけるボランティアの方々にお集まりいただけるか、思案を重ねましたが、当初は既存の点訳ボランティア・グループの皆様の協力を得ようと考えたのですが、そのような皆様は既に活動をお持ちで、私どもに割いて下さる時間のないことが、段々分かって参りました。そのようにしているうちに、ライトセンターの方にご相談させていただきましたところ、「ゼロから始めたらどうですか？」というお言葉をいただき、何か風通しがよくなった思いがしてきただけでした。

そしてグループ名を「羽化の会」として、漢点字訳

ボランティア活動をお願いすべく、その会員を募集することになったのでした。

その第一回の講習会を、一九九六年一月三十一日（水）に、神奈川県ライトセンターを会場に開催したのでした。

☆『漢字源』の漢点字版

後で聞いたことですが、四回の講習を終えた後、主催した私と吉田さんには告げられぬまま、講習会にお集まり下さった皆様は、話し合いを持たれたとのことでした。つまり私どもが余りにも頼りなく見えたものらしく、主催者とうり付き合おうか、といったことが話し合われたようです。しかしそれだけに、案ずるより何とやら、次第に結束の堅いグループが出来上がって行きました。今振り返っても、奇跡と感じられるほどでした。

私は当初、活動の目標に、三つの柱を立てました。これは現在も、規約として掲げられております。

- ・ 基本的な書籍の作成。辞書、古典、詩歌など、なくてはならないもの、評価の定まっているものの漢点字訳。

- ・ 漢点字の入門書。漢点字を学ぼうとする人のため

の読本、その他。

- ・ ニーズに応える。漢点字使用者に呼びかけて、ニーズを募集して製作。

の三つの柱、それぞれ平均に進められるのが理想的と考えておりましたが、現実には、ニーズはなかなか集まらず、漢点字学習者向けの読本も、まだ不十分な状態です。

勢い基本的な資料への傾注となったのですが、それにはもう一つ大きな理由が重なりました。

同年（一九九六年）四月に、横浜国立大学教授の村田忠禧先生が、学習研究社様からデータを譲り受けられて、『漢字源』（藤堂明保編）の漢点字版を作られたという報道がありました。先生には以前お会いしたことがあり、お電話をさせていただきましたところ、快く、同じデータを使用して、本会でも同書の漢点字版の製作ができるようお計らい下さいました。そのお話しを会に持ち帰り、会でもやってみる価値は十二分にあると、賛成者が多数を占めて、村田先生にお願いして、学習研究社様にお話ししていただきました。

同時に、本会発足時に活動にご参加下さっていた木下和久さんが、吉田さんのご主人が作られたプログラムを、さらに使いやすいものにして下さり、現在使用

しているプログラム、「EIBRW」の原型が完成しました。

さらにもうお一方、当時市会議員を務めておられた大滝正雄先生のご尽力で、市の図書館である中央図書館に、『漢字源』の漢点字版を納入することになったのでした。

全九十巻、読者の皆様のご利用をお待ちしております。

このようにして本会最初の活動が、『漢字源』の漢点字版の製作という、思いも寄らぬ成果を産んで、活動の方向性も自ずと定まって参りました。

☆『常用字解』漢点字版への挑戦

三つの柱、その三番目の「ニーズ」への対応については、残念ながら決して多数のタイトルを仕上げることはできておりません。今後は常に心がけて、ニーズをお寄せいただけるよう、取り組んで行く必要のある課題と考えております。漢点字使用者の皆様、是非ニーズをお寄せ下さい。

二番目の柱である漢点字学習用の資料の充実は、テキストの製作以外は、その時のニーズに応じた資料を作成して参りました。

取り分け定期刊行物として、漢点字の読みの鍛錬を目的にオリジナリに編集し製作している「横浜通信」（無料）、月刊にまとめてお届けする「朝日歌壇・俳壇」、健康記事（朝日新聞、読売新聞からの抄訳）（有料）、そして東京のグループが製作している朝日新聞のコラム「be on Saturday」（無料）は、漢点字の触読の鍛錬として最適であるばかりでなく、趣味にも生かされ、鑑賞力と理解力の鍛錬にも、大いに適った資料であることは、晴眼者の皆様と共通します。斯く申す私も、歌壇・俳壇の製作を始めたころは、全くと申してよいほどに、読みなすことができませんでした。今思えば、読み切れない苦しさに堪えることができたからこそ、読む力を得られた喜びがあると言えるようです。

『漢字源』に始まった本会の活動、その最も大きな柱は、基本的な資料の製作ということになります。

その中から二冊を選びますと、『論語』と歌集『白描』ではないでしょうか。『論語』は言うまでもなく孔子の残した語録です。現代にも充分有用な、示唆に富んだ書です。現在も多くの人々が、折りに触れて紐解いていると言われています。

『白描』は、戦時中に亡くなったハンセン病の歌人

「明石海人」の歌集の復刻版を漢点字訳したものです。以下に序文を掲げます。

《癩は天刑である。

加はる答（しもと）の一つ一つに、嗚咽し慟哭しあ
るひは呻吟しながら、私は苦患の闇をかき搜つて一縷
の光を渴き求めた。

―深海に生きる魚族のやうに、自らが燃えなければ
何處にも光はない―さう感じ得たのは病がすでに膏肓
に入つてからであつた。

齡三十を超えて短歌を學び、あらためて己れを見、
人を見、山川草木を見るに及んで、己が棲む大地の如
何に美しく、また嚴しいかを身をもつて感じ、積年の
苦澁をその一首一首に放射して時には流涕し時には抔
舞しながら、肉身に生きる己れを祝福した。

人の世を脱れて人の世を知り、骨肉と離れて愛を信
じ、明を失つては内にひらく青山白雲をも見た。

癩はまた天啓でもあつた。》

このような書物は、視覚障害者には、漢点字でなけ
れば決して読めないものだと言うことを、このような
書物を読むことに意欲を持つ視覚障害者は、是非回り

道と思つても、漢点字の門を敲かれることをお勧めし
なければならぬということ、申し添えます。

そして二〇〇四年から、『常用字解』（白川静著、
平凡社）の漢点字訳に着手し、六年がかりで完成に漕
ぎ着けました。その後完成した『人名字解』（白川
静著、平凡社）とともに、中央図書館でご利用をお待
ちしております。

『常用字解』の完成によつて、それまでは知り得な
かった漢字の構成、形の把握が、視覚障害者にも充分
開かれたものであることを、私自身、証明できたと思
えております。

高名な視覚障害者の方が、「視覚障害者には漢字の
形を理解することはできない」と言われたとお聞きし
ました。また盲学校の先生方が、視覚障害の子供たち
に、漢点字を学ばずとも漢字を教えることができるこ
として実践されているとも伺いました。

しかし前者については決してそういうことはなく、
漢字の形もその構成を辿ることで、充分把握できるこ
とが、証明できたと考えております。たとえば
「月」、この形は天体の「つき」、その三日月形に由
来すると言われます。また「肉」を簡略化した形でも
あります。また「祭」の左上の形も「肉」に由来する

「月」を、さらに斜めにした形です。「夕」もまた天体の「月」の形に由来します。「多」は、「肉」の略体を重ねた形で、沢山の肉が積み上げられていることを表しています。

「月」にはもう一つの由来があります。「膳、騰、藤」の「月」は、「舟」の略体に由来します。その基本形は「朕」で、舟形の盥を輿のように担ぎ上げることと意味しているとされます。この「朕」に「言、馬、水」が加えられて、別の文字ができたと言われるのです。

これはごく一部に過ぎません。このように漢字の形を、漢字の構成を解きほぐすことから、充分知り得ることを明らかにできたのも、この『常用字解』の完成のお陰です。もう一つ、私どもの工夫をご紹介します。

それは「字式」と呼ばれる、字形を数式の表現を借りて表そうというものです。

「+」は左右の関係を、「/」は上下の関係を、「・」は上下の関係で、くっついたものを、「>」は中に含む形を表すことにしました。

例を挙げますと、「古」は「十・口」、「固」は「口>古」、「枯」は「木偏+古」、「個」は「人偏

+固」となります。

少し複雑なものでは、「岡」は「口>ノ・一・山」、「罔」は「口>ノ・一・亡」となります。

このように「字式」で表現できれば、それに沿って指でなぞることができて、最終的には漢字の形と構成の理解にまで到達できるということになります。

さて二つ目の、漢点字を学ばなくても漢字の形を理解することはできるということについてです。私はこれには懐疑的です。なぜならば、点字の考案が既にその答えを用意しているからです。

ルイ・ブライユは、一八二五年に「点字」を創案しました。そこに至るには彼の天才的な発想が見られますが、そのことは置いて、彼がなぜ「点字」の開発を試みたかということを考えてみましょう。周知の通りそれは、それまで読めない文字を読まなくてはならなかった視覚障害者が、希求し念願した文字だったということに因ります。それまでの触読文字は、一般のアルファベットを浮き出させたもので、文字を一つ一つ判読するのがやっとというもので、文章を読むことはできなかつたと言われます。しかもその文字が読めなければ、劣等生の烙印を捺されるという始末です。詰まるどころ当時の盲学校では、晴眼の先生方と視覚障害の

生徒の間には、越えられない何かが存在していたとも言えますし、ブライユの「点字」は、その壁の高さを、低くすることに成功したと言えるのではないかととも言えるのです。しかしブライユの「点字」は、彼の生前には普及を見ることはありませんでした。彼の逝去後、欧米に広く行き渡ったと言われます。なぜ普及が遅かったのか、それは視覚障害者の教育に当たっていた晴眼の先生方が、「点字は文字ではない」として、認めることを強硬に拒んだからだと言われます。

このようにブライユの「点字」が世に出るに当たって、それまでの触読文字への批判が大きなエネルギーとなっていたことは、現在にも充分通用することとされています。

前世紀の後半に、アメリカで、オプタコンという装置が開発されました。小型のカメラで文字を画像として読み取り、細かいピンディスプレイにその形を表示させるものでした。大変高価なものでしたので、我が国では持つ人は余りいませんでしたが、気づいてみると、普及はしなかったようです。というのも、使っている方がどのように読んでいるか拝見していたところ、文字を一つ一つ拾うのがやっとで、しかも日本語は読めないとのことで、使い道は極めて狭いものだった

たことが判明したのでした。

しかしこのような装置が求められるには、それなり
の理由があります。いわゆる墨字の文字を視覚障害者
もそのまま読めないかという欲求です。現在ではボラ
ンティアの力をお借りしなければ、本を読むことはで
きません。それを何とか自力で読めるようになりた
い、これがオプタコンの開発や浮き出し文字への欲求
となつて、点字離れを引き起こしているのではない
か、そう思われてなりません。

しかし見た通り、墨字をそのまま触読文字とするこ
とは、ブライユ以前に逆行することに他なりません。
果たしてそれでよいのか、議論が必要ではないでしょ
うか？

☆晴眼者でもそこまで必要なのに、視覚障害者に
…？

ここまでお話しして参りますと、必ず言われること
があります。「岡田の言うことは分かる。だが岡田の
ような欲求を持つ者は晴眼者にも希なのだ。そうであ
るならば、岡田は特別で、他の視覚障害者の皆さんに
は、漢字の知識は必要ではないのではないか？そうい
う人には無理に教える必要もないのではないか？」と

いうご意見です。

果たしてそうなのでしようか？

一歩退いて、そのご意見を是としてみましょう。つまり「自分には必要ないから勉強しません」とある視覚障害者が言いました。これを是とします。これは晴眼者の方が視覚障害者に向けておっしゃったものを視覚障害者に言わせたものです。

何か変ですな！

私が『常用字解』から学んで漢字の形と構成を理解したのは、あくまで必要に迫られてのことでした。そもそも私が漢点字を学んで漢字の世界を知りたかったのは、色々な本を読むためでした。たまたま本会の活動をするに当たって、『常用字解』から得るものが莫大で、現在そこから得た知識や考え方が大きなウエイトを占めてしまった、これが現況で、本来はここまで文字に踏み込む積もりはありませんでした。しかし必要あって勉強してみた、本会の活動のお陰で、それが実現できたのでした。もしこの活動がなくて、しかもこのような勉強をしたいと思えば、必ず挫折することになります。

これでこのご意見へのお答えは充分だと思えます。晴眼の皆さんは、こうしたいと思えば何時でも始める

ことができます。それは初等教育から識字教育を受けておられて、勉強、あるいは研究の資料も、その入り口までは調っているからです。

では視覚障害者はどうかと言えば、識字教育も、自ら要らないと言うから受けさせませんでした。勉強、あるいは研究の資料も、準備ができていません。最初に望んでいれば考えもしようが、望まなかったあなたが悪い、こういう意味の言葉は、案外普通にかけられていました。この通りではないにせよ、望まないのが悪い、今となってはもう遅いといった拒絶の言葉は、耳に馴染んでおります。

盲学校の先生方、図書館にお勤めの皆さん、視覚障害者を対象にお仕事をなさっておられる皆さん、こういう言葉は決して使わないで下さい。使わないようにするなら何をすればよいか、そこをお考え下さい。使わないのなら黙っていよう、いやはやこれもよく用いられた方法でした。

現在本会では、横浜で『萬葉集釋注』を、東京で『岩波古語辞典』を漢点字訳しております。これらも基本的な資料という大きな柱のもとに製作しております。

ご期待下さい。

点字から識字までの距離(九八)

野馬追文庫(南相馬への支援)(十六)

墨田区立ひきふね図書館 山内 薫

二〇一三年に届けた本

東日本大震災被災地支援活動「子供たちへ あしたの本プロジェクト」のホームページの「だいじょうぶセットと野馬追文庫」(<http://www.blog.jbby.org/ae/about/?lang=ja>)にKさんが野馬追文庫で送った本を報告している。二〇一三年一〇月には以下のような今まで送った本のリストが掲載されている。

『トリゴラス』(文研出版)、『いいからいいから』(絵本館)、『そら、にげろ』(偕成社)、『ふしぎな話』(大月書店)、『紙芝居かっぱのすもう』(童心社)、『ころころにゃーん』(福音館書店)、『注文の多い料理店』(ミキハウス)、『じゅげむ』(クレヨンハウス)、『うさぎさんてつだってほしいの』(富山房)、『きつねによろぼう』『二年間の休暇』(福音館書店)、『紙芝居かさじぞう』(童心社)、『てつがくのライオン』(理論社)、『おもちのきもち』(講談社)、『だいくとおにろく』(福音館書店)、『ドラえもん1』(小学館)、『放射線に

なんか、まけないぞ!』(太郎次郎社エディタス)、『はなをくんくん』『わたしとあそんで』『みどりいろのたね』(福音館書店)、『へっこきよめさま』(童心社)、『月人石』(福音館書店)、『おじさんのかさ』(講談社)、『シャーロットのおくりもの』(あすなろ書房)、『一休さん』(講談社)、『きゅうりさんあぶないよ』(福音館書店)、『じごくのそらうべい』(童心社)、『おにぎり』(福音館書店)、『うまいものやま』(童心社)、『てんぷらびりびり』(大日本図書)、『さんびきのやぎのらがらどん』『おだんごばん』『おおきなおおきなおいも』(福音館書店)、『イソップのお話』(岩波書店)、『さるのせんせいとへびのかんごふさん』(ビリケン出版)、『手ぶくろを買いに』(偕成社)、『NEOぷらすくらする図鑑』(小学館)、『はなさかじい』(フレールベル館)、『紙芝居くわずによろぼう』(童心社)、『ふたりはともだち』(文化出版局)、『オムライスへイ!』(ほるぷ出版)、『コックメーカー!』(徳間書店)、『つきのぼうや』(福音館書店)、『やまんばのにしき』(ポプラ社)、ほか、高知こどもの図書館から寄贈いただいた絵本

この連載では二〇一二年一二月に送ったイソップのお話まで、それ以降の本について報告していなかつ

たので、今回は二〇一三年に送った本とそれにまつわるやりとりなどを報告する。

二〇一三年一月

『さるのせんせいとへびのかんごふさん』穂高順也作

荒井良二絵 ビリケン出版

二〇一三年二月

『手ぶくろを買いに』新美 南吉作 黒井 健絵 偕成社

この本についてのSさんのメール

「『手ぶくろを買いに』についてですが、よいと思います。福島県立図書館で所蔵していた黒井健さんのものと、わかやまけんさんのものを読んでみました。どちらもすてきな絵本でした。そして、あらためて新美南吉は天才だと思いました。人間をこわくないと思える子狐に、救われる気がします。疑心暗鬼な親の気持ちと、無邪気な子ども様子が、身近な親子に重なります。つつい、狐の親子を福島の親子、あかりの灯る家で眠りにつく人間の親子を、東京の親子のように感じてしまい、泣いてしまいました。私は震災以降、何を読んでも、以前とは少し違う読み方になってしまっています。以前から思っていたのですが、黒井健さんの絵本の活字は少し読みにくいですね。近くにこの本を

読んでくれる大人がいるといいな、と思います。黒井健さんの絵本、よいと思います。雪の反射やまぶしさが、最近の雪景色に重なります。福島の子どもたちに、この『手ぶくろを買いに』に出会ってほしいと思いました。」

高知子ども図書館からの本の中に『せんたくかあちゃん』が入っていたことについてSさんからのメール「『せんたくかあちゃん』は、もう少し待っていただけですか？ 私の住む福島市と南相馬市では状況が違うかもしれませんが、今年に入ってからまだ一度も外に洗濯物をほしていません。放射線の心配ではなく、雪と寒さのためです。もう少し暖かくなってからの方が、子どもたちも共感できると思います。人によって違うと思います。私は気持ちよく洗濯物をほしたい、でも、原発事故以前のように気持ちよくほせない、という気持ちでいます。「そんなこと気にしてたらここでは暮らせない」という人も、もちろんいます。最近、また福島に、子どもを屋内で遊ばせるための施設ができました。外で遊ばせるのが心配だという保護者が、まだ多いのだと思います。」

このメールについてSさんは現在の心境をこう述べています。

「時が経て、少しずつ変わっていく気持ちとのズレがあります。当時はそう思っていたけど、今はそれほど強く思わない、ということもあります。今では原発や除染のニュースを見ても、甥は怒りをあらわにはしませんし、冷静に考えています。福島の人たちは、当時よりも静かに受け止めていると感じます。そこには、あきらめ、もあるのかもしれませんが。あきらめ、といっても、前向きなあきらめもあります。現状を受け止め、何ができるか考え、動き出す時期にきていますと感じています。」

二〇一三年三月

『小学館の図鑑NEO+（ぶらす）くらべる図鑑』（小学館）

二〇一三年四月

『はなさかじい』松谷みよ子 瀬川康夫絵 フレーベル館

二〇一三年五月

紙芝居『くわす女房』作…松谷みよ子 絵…長野ヒデ子 童心社

二〇一三年六月

『ふたりはともだち』
作・絵…アーノルド・ローベル 訳…三木卓 文化出

版局

二〇一三年七月

『オムライスヘイ!』 武田 美穂…ほるぷ出版

『100万回生きたねこ』（佐野洋子 ポプラ社）が候補に挙がった時にSさんのメール

「うまくお伝えできないのですが、震災前は、朗読したこともあり、すてきなラブストーリーだと思っていました。しかし、震災後、もう2年もたっているのに、私には、まだ、子どもたちに読んであげようと思えない絵本です。私自身、生きて、ハッピーエンドでおわる話をもとめてしまいません。もしばらくの間、絵本の世界では幸せな楽しい時間を過ごせるようなものをお願いしたいと思っています。逆境にいても、最後には自分の力で幸せになれるというストーリーの絵本もいいな、と思います。たとえば、『はちうえはぼくにまかせて』のような。

それに対してKさんは

「これは（たとえば）ですので、今回のご提案ではないのかもしれませんが一応読み直してみました。子（いのち）が育っていく、それをまっすぐ信じている作者の気持ちがとても心地よい本だと思いました。た

だこの本を南相馬に私は今は送れないかな？ 私は山内さんが大好きな『こすずめのぼうけん』もまだ南相馬にはお送りできないのですが、それは私の仕事で、親子支援がフィールドの心理相談員だからかもしれない。南相馬は、いま家族揃って生活している方よりも、かつての家族は何らかの形で今離れて暮らしているのが「普通」に近いように思います。特に仮設の人たちは、ほとんどの方はかつての家族とは離れて暮らしています。家族が、この子のこころの基地にあつてこそその物語、それはいま南相馬でもとても危うくなっている……心配です。」

私の提案「絵本の世界では幸せな楽しい時間を過ごせるようなものをお願いしたいと思っています。逆境にいても、最後には自分の力で幸せになれるというストーリーの絵本もいいな、と思います。という意見をいろいろ考えていましたが、『コツケモーモー！』（徳間書店）などどうでしょうか？この本は特別支援学級などでもよく読みますが、みんなゲラゲラ笑ってくれます。」

ということと二〇一三年八月は

『コツケモーモー！』作・ジュリエット・ダラス
コ
ンテ 絵・アリソン・バートレット 訳・たなかあ

きこ 徳間書店を送った。

この間南相馬の仮設住宅を訪問したKさんからのレポートが届いた。

「今回、仮設二箇所のみですが、スタッフのお話からは、紙芝居はあまり需要がなさそうでした。二箇所とも綺麗に揃えて置かれていて、使われた気配がなさそうでした。一方二箇所とも見当たらなかったのは、三月に送った図鑑ですね。あと、二〇一一年一二月に送った『二年間の休暇』（福音館書店）これも見当たらなかったです。二箇所ともパツと目についた絵本がいちばん最初、つまり二年前の八月に送った『トリゴラス』もさんが、初めにお送りしておきたいと強く主張された絵本ですね。あとで力を持ってくる絵本だろうと。何か二箇所ともそんな雰囲気の本棚に置かれていました。目立っていました、どうしてかはわかりませんが……」

二〇一三年九月

『つきのぼうや』作・絵・イブ・スパンング・オルセン
訳・やまのうち きよこ 福音館書店

この本は二〇一二年の一二月に南相馬の仮設住宅で
読んだ本。

二〇一三年一〇月

『やまんばのにしき』松谷みよこ 瀬川康夫 ポプラ社

Sさんから「『やまんばのにしき』は、以前、推薦させていただいた絵本ですね。お年寄りが活躍し、元気な赤ん坊が出てくる話なので、喜んでいただけるのではないのでしょうか。やはり、最後は幸せになる話、愉快な話、何度でも読みたくなる話がうれしいと思います。日本の昔話集のような読み物は、すでに文庫に入っていましたでしょうか？大人も子どもも楽しんで、コミュニケーションにつながるような、読み物がないか、探してみます。文庫に推薦する絵本ではありませんが、私が福島の子どもたちに、読んであげたいと思っている絵本があります。それは、『花さき山』です。この絵本に描かれた東北の風土というか、東北の人たちのやさしさ、がまん強さを福島の子どもたちに伝えたいと思うからです。多くのがまんを強いられている福島の子どもたちに、これ以上のがまんに強いるということではなく、やさしい気持ちで大事にしてほしいというメッセージをきちんと伝えるためには、読み語りという方法で手渡すのがよいのではないかと思っています。先日、甥と姪たちに『花さき山』を読んであげました。原発事故のその後のニュースを見

て、怒りをあらわにしていた中学2年生の甥も、静かに聞いていました。本当にいつも、どうしたらよいのかと考えています。」

Kさんからは「一・一月分（あるいは一・二月）、読み物を届けたいと思いますが、いかがでしょうか？読み物ですと、絵本ほど、わあくく楽しいというようなだけの内容というわけにいきませんが、以前から、昔話集のようなもの、というご提案はありましたね。具体的にありましたらお願いいたします。」という提案があったので、私は

「グリム童話が良いのではと思います。以前Yさんが「忠臣ヨハネス」を思い出したとおっしゃっていましたが、出来ましたら、この作品が入っているものが良いと思います。」と忠臣ヨハネスが入っているグリム童話集の内『語るためのグリム童話集第1巻「ヘンゼルとグレーテル」』小澤俊夫 監訳／オットー・ウベローデ 絵／小澤昔ばなし研究所 再話 小峰書店）を推薦した。以前にも以下のようなごさんの手紙の一文を紹介した。

「私は一年前のあの震災のときにふとグリム童話の「忠臣ヨハネス」というお話しが頭をよぎりました。あの未曾有の震災の中心にいて、あの話を思い出すことができて、私自身が、人間としての尊厳を守ることが

できたのではないかと今になると振り返ることができません。人間は、苦悩の中にあるとつい憎しみや恐怖で我を忘れてしましますが、困難をあえて引き受ける覚悟を持つことが必要だと忠臣ヨハネスは私に言ってくれたような気がします。このような経験からも、私は自然に物語の中にある力を自分の生きる糧にできると考えています。」（本連載の南相馬への支援八）

その後Yさんはめでたく男児K太郎君を出産された。K太郎君が一ヶ月になった時にYさんからKさんに宛てた手紙の一部を引用させて頂く。

「（前略）世の中は、東京オリンピック招致で大きすぎますが、このことで福島はますます忘れられるのではないかと思えます。今、汚染水の問題が取り上げられていますが、本当にいつになったら廃炉にできるのか？（できないかも）と暗澹たる気持ちになります。経済最優先の今の日本では原発はこのまま推進されるのでしょうか？もう福島のことはなかったことにされ、（または千年に一度のたまたま起きた大震災によって引き起こされた不幸な事故とされて）忘れられてしまうのでしょうか。でもここに住むものは一日として忘れて暮らしていくことはできません。今も私の家庭では飲料水は購入したミネラル・ウォーター、汚染水のことを考えるとこの近海の魚介類もどうかと考

えてしまいます。もう慣れてしまったとはいえ季節の地物の野菜や果物を楽しんでいた生活は二度と戻ってこないかもしれません。（中略）この子のために、前向きに生きていかなきゃといつも元気をもらっています。こんなに小さくて一生懸命絵本を見ている姿を見ると、一体この小さな頭でなにを考えているんだろうと頭のなかをのぞいてみたくなります。絵本を見ている時はいつも抱っこかどこか私の体を触って聞いているんです。それを見るにつけやはり絵本は心と体のスキンシップなのだと思います。安心した状態でないと絵本は心から楽しめない。心から信頼した人と絵本を分かち合う経験ができることが、今の息子にとっては何よりの喜びなのではないかと推測しています。絵本がどのようにに子どもに影響を与え、心を育てていくかというの私がずっと抱えている課題ですが、息子との日々はきつと私に何らかの答えを与えてくれるだろうと思います。（後略）平成二五年九月二六日」

二〇一三年二月

クリスマスにちなんだ本ということで『急行「北極号」』（作・絵・クリス・ヴァン・オールズバーグ 訳・村上春樹 あすなる書房）を推薦した。

Kさんからも「大人（YA）のコーナーのあるような絵本ですね。絵が目を凝らして観ないとならない

ような暗い印象を持ちますが、そこが魅力ですものね
……。訳者 村上春樹さんの名前も目を引くかもしれ
ません。」

Sさんからは「『急行「北極号」』、どんな内容か
思い出せなかつたので、読み返してみました。とても
よいと思います。すてきなお話でした。河出書房新社
とあすなる書房のものを両方読んでみたのですが、あ
すなる書房のものは、改訳版なんです。同じ村上春
樹訳でも、表現がかわっていて驚きました。旧版のよ
いところと改訳版のよいところがあると感じました。
甥や姪たちにも、クリスマスが近づいたら、読んであ
げたいと思います。」

ところで横浜漢点字羽化の会が一九九六年一月の神
奈川ライトセンターでの講習会を期に本格的な活動を
開始して二〇年を迎えます。翌年の四月から刊行され
ているこの「うか」も一〇五号を迎え、図書館で一〇
〇号までを四分冊に製本した合冊は、書架の一八セン
チを占める大部なものになります。ここまで長きにわ
たつて活動を続けてこられたのは、ひとえに岡田さん
の志の高さによるといえるでしょう。漢点字の普及と
いう大きな目的に向けて、これから先一〇年二〇年と
この会の活動が続くことを祈念します。

「東京漢点字羽化の会」第118～120回

例会報告とわたくしごと

木村多恵子



2015年10月の例会（第118回）10月7日（水）

13・30～15・30、場所、港区ヒューマンプラザ

7階竹芝小ホール

9月9日は台風18号の接近による被害を避けて、例
会は初めてお休みにした。

発足以来ほぼ10年になるが、初めての休会で、木村
としては残念に思う。

いつものように朝日「歴史学」の入力、校正の組み
合わせを決めた。

横浜羽化のYさんが出席され、『古事記』の校正の
お礼を言われた。続いて、『萬葉集釋注』第五巻の校
正を依頼された。皆様どうぞよろしくお願いいたしま
す。

基本的な記号類、その他入力方法について今回も岡
田さんから説明された。

『古語辞典』は、まとめ役のSさんから、「こ」の

終わり近くまでいただいたと岡田さんから報告された。

新しく会員を募るために、ちらしの中身を再確認して、各地のボランティアアセンターなどに置かせていただくことにする。

2015年11月の例会(第119回)11月11日(水)

13:30~15:30、場所、ヒューマンプラザ

7階竹芝小ホール

何時ものように朝日の記事入力グループ分けを決めた。

11月18日横浜へ印刷に行っていた方々はSさんとNさんが行ってくださることになった。何時もありがとうございます。

古語辞典の文字について、記号類について、質問を受け、岡田さんの説明を聞いた。

2015年12月の例会(第120回)12月9日(水)

13:30~15:30、場所、ヒューマンプラザ

7階竹芝小ホール

今月は「東京漢点字羽化の会」発足、まる十年を過ぎ、この12月は11年目に入る。皆様お忙しい毎日の中から、漢点字のために、精一杯ご協力くださいまし

てありがとうございます。今後ともよろしくお願いいたします。

素晴らしいことに、2016年は「横浜漢点字羽化の会」は、東京の倍の、20年になるという。横浜の皆様おめでとうございます。これまで先輩方のご指導により、わたしたちもここまで続けてこられました。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

今回は新しい方がお見えになり、見学なされた。是非正式に会員になってくださいますようよろしくお願いたします。

朝日の「歴史学」の記事についてグループ分けその他、いつものように決めた。

1月20日の横浜での印刷は、IさんとSさんが行って下さることになった。何時もありがとうございます。

2016年3月の日程も決めた。

細かいようではあるが、大切なことで、入力方法について岡田さんが説明した。

* 予告

2016年1月の例会(第121回)1月13日(水)

13:30~15:30、竹芝小ホール

- 2016年1月の学習会(第95回) 1月23日(土)
- 18..30~20..30、第2会議室
- 2016年2月の例会(第122回) 2月10日(水)
- 13..30~15..30、竹芝小ホール
- 2016年2月の学習会(第96回) 2月20日(土)
- 18..30~20..30、第2会議室
- 2016年3月の例会(第123回) 3月9日(水)
- 13..30~15..30、竹芝小ホール
- 2016年3月の学習会(第97回) 3月19日(土)
- 18..30~20..30、第2会議室

わたくしごと

暖冬の今年とはまるで違う、真冬の、特別寒いある朝のこと、わたしは右手に白杖、左手に資源ゴミをいっぱい持って家を出た。まず近くの公園入り口に決められている資源ゴミ集積所に、この重たい点字の雑誌や種々雑多な書き損じや手紙などを置いてから郵便局へ行く積もりだった。ところがいつもは少しは置いてある雑誌類の束が見つからない。「資源ゴミのなかま」は、かならずしもぴったり同じ場所にあるとはか

ぎらないのであちこち探した。そのうち公園の中に入り込んでしまったらしく、自分の居所がわからなくなってしまった。

人も自転車も通らない。さて困った。この紙ゴミを家に持ち帰るのは億劫だ。かといってこの荷物を持ち歩くには重すぎる、などと心につぶやいていた。

「あれ？いつもの道と違いますよ。公園の中ですよ」と声をかけてくださる女性がいた。「ああ、わたし、資源ゴミの置き場所を探しているうちに入り込んでしまったのですね。資源ゴミの置き場所を教えてくださいませんか？」とお願いした。

どうやらこの方は、わたしが何時も公園の外周を歩いていることをよくご存じのようだ。

「資源ゴミは出ていませんよ」とその方が言った。わたしが集める日を間違えたのだ。がっかりしているわたしに、その方は「これからどこへ行くのですか？」と聴いてくださった。「郵便局へ行きます」と言うと、「じゃあ、その袋をここへ置いておきなさい。帰りに持って行けばいいでしょう。もしゴミを集めに来なかったら、このベンチに置いてあげます

から」と言ってくださる。

「ああ、それはとてもありがたいのですが、帰りにまたこの袋を探すのが大変なので、やっぱり家に持帰って出直すことにします」と言うと、「郵便局はどのくらい時間がかかるの？」と聴いてくださる。「三、四十分かしら」

「ああ、わたしまだここに一時間はいるから、それ、置いていきなさい。あなたが帰ってきたとき、わたしから声をかけるから」と行き届いた優しい言葉にわたしは素直に甘えることにした。しかも、いつもわたしが歩いている道まで連れて行ってくださった。

やれやれ、片手は重たい荷物が無くなり楽になりほつとして、郵便局へ行く信号を渡った。

「あら？木村さんおはようございます」と、かつてのガイドヘルパーボランティアの懐かしいKさんの声がした。「何処へ行くの？」

「郵便局です」

「今日は時間があるから送って行きましょう」と、またありがたい言葉。

10分足らずの道を楽しく話ながら郵便局へ行くと意外に混んでいた。公園の人とお約束があるので、順番を待ちながら久しぶりに話をしながらも気が気では

ない。

やつと局での用事が済んで、Kさんは家まで送ってくださると言う。

わたしはちよつと申し訳ないと思いつながらも、つい先ほどの公園での厄介な事情を話した。できたら公園へ寄ってベンチに置かれているはずの資源ゴミを見つけていただきたいとお願ひした。

「あら、そんなこと大したことはないから行きましよう。そして何時ものエレベーターまでお送りすればいいでしょ？」と心安く受け合ってくださいました。

ところが公園へ行ってみると、肝心なわたしの荷物が無い。ベンチ全部、木陰、滑り台の周り、あちこち探しても無いという。

あの人ご自分の家に持ち帰ったのかしら？

さてどうしよう、このまま帰っていいものか思案している、

「あのう、資源ゴミを Nさんに頼んで行った人でしょう？」と若い女性が声をかけてきた。

「あ、はいそうです」と言うと、

「Nさんからことずかりました。収集には来なかつたけど、Nさんが責任を持って今度出しておきますので」

「え？その方がお持ち帰りになられたのですか？」

「Nさんはこの公園の掃除をしているので、掃除道具などを入れる物置に置いてあります。わたしがテニスをまだ暫くやっているの、Nさんから引き継いだのです。Nさんとはよく話をしてるのでご心配なく」と言う。

「ありがとうございます。で、おたくさまのお名前を教えてくださいませんか？今度お会いしてもわたしは分からないのでお礼も申しあげられないと思います」

「ああ、そんなことかまいませんよ」

「Nさんにもどうぞよろしくお伝えください」と言つてわたしは、Kさんに送られて我が家へ帰つてきた。

これは2、3年前の真夏の日盛りの中を歩いてきたときのことである。普段あまり利用しない駅からの帰りで、ちよつぱり自信なく、用心深く歩いていった。すると、「お手伝いしましょうか？」と言つて寄り添う女性がいた。わたしは自分が今いる位置の確認をした。「どちらへ？」と聴いてくださるので、「Y図書館があるところです」と言うと、

「わたしは最近こちらへ越してきたので、その図書館は分かりませんが、あなたは道が分かっているから、よかったですから、よかったですから、一緒に歩きましょうか？わたしはこの辺りを知りたくて散歩をしているので、時間は大丈夫です」とわたしを安心させてくださった。

なんととっても人様と歩けば危険は避けられるので、今日もお言葉に甘えた。

「ああ、ここが図書館ですか。今日は川の方へ行つてみようと思います」と言うので、「でしたらこの道をこう行つて：」なんて反対にわたしが方向だけをお教えしてお礼とさようならでお別れした。

そして翌日、わたしは前日とは違う駅からの道を歩いていった。

すると「あれ？こんなところまでいらしたの？ずいぶん遠くまで来られるのですね、昨日と違いますね」という声があった。

わたしは一瞬昨日の方の声とは気づかず、あれ？わたしは迷つてしまったのかしら？と戸惑った。

「昨日の所へ行くのでしょうか？一緒に行きましょう」と言つてくださった。そうして昨日わたしと出会つたところまで導こうとなさる様子を感じて、「あ

あ、こちらの駅から来た時はこの道の方が近いのです。」と言って自分がいつも行く道へと歩き始めると、その方も付いてきてくださり、間もなく「ああ、ほんとう、昨日の道へ出た」と小声で叫び、今日もエレベーターまでエスコートしてくださった。なんとおおらかで優しい方だろう。

風雨の中の歩きも難儀することがある。

激しい風雨の中、信号を渡りながら傘がオチョコになつてしまい、渡り終えたはずがかなり逸れていつのまにか駐車場へ迷い込み、まごまごしていると、若い女性が「どちらへ行きますか？」と声をかけてくださり、まず駐車場から歩道へ連れ出してくださいました。

「わたしセブンイレブンで働いていたのでお客さんのこと知っています。」

「ああ、お世話になつています」とわたしは言つた。

「おうちはどちらです？」と言って風雨の中を無事送り届けてくださった。

雨といえばこんなこともあった。

わたしがひとりで行く郵便局は大きな通りから小道

に入ったところにあり、その入り口が小さくて、局に入り辛く、ピタッと一度で見つけられることも失敗することもある。

ある冷たい雨の降る日は失敗だった。どうしても入り口が見つからない。通る人もいない。入り口は近いはずなので、いつそのこと郵便局へ電話をして、迎えに来ていただこうかとも考えたが、この雨に濡れさせてはいけない。そこで大通りまで戻つてやり直そうとして大通りへ戻り始めた。

あ、どなたか歩いて来る、「すみません、郵便局へ行きたいので入り口を教えてください」とわたしは言つた。

「わたしも郵便局へ行くので一緒に行きましょう」と女性が言うのでほっとした。

冷たく激しい雨にすっかり冷え込んでしまったが、心は暖かくなり、用事を済ませて、家に帰り急いでお風呂を沸かして身体もゆつくり暖めた。

そんなことがあったあと、一週間ほど立つてからだろうか、郵便局に近づいたとたん

「郵便局にいくのですか？」と聴いてくださった男性がいた。「はい」と言うと「郵便局の前が会社なんで

す」と言う。

多分わたしが入り口を苦勞して探しているのを何度かお仕事をしながら窓越しに半分あきれ、半分きのどくに、と思いつながら自分のお仕事から離れる訳にはいなくて、気にしていらしたのだろう。今日はたまたま外にいらしたので声をかけてくださったのだ。わたしにとつてはラッキーな日であつた。

これは穏やかな春の日差しいっぱいするときである。

さて、この道にかかればおおよそ家まで迷うことは少ない、安全圏にかかつて、わたしは日差しの中にたたくずで近くのお宅のお庭で鳴き交わしている鳥たちの轉りに耳を傾けていた。

そこへ小学生と思える三人が、ひそひそささやきあう声が聞こえてきた。そして思い切つたように、「あのう、どちらへ行きますか？」と声をそろえて言つてくださった。あつ、そうだったのか、彼女たちはどうやってわたしに声をかけたらいいか相談していたのだ。たぶんたらずんでいるわたしの様子からは困り果てているようでもない。でももしかしたら困っているかもしれない。どうしようか、と相談してくれていたのだろう。わたしは当然彼女たちの優しさにうれしく

なつて、さらににこにこ顔になつていたと思う。

「ああ、ありがとう、この道を真直ぐ行けば、H通りへ出られるでしょう？」

「はい」とかわいく明るいユニゾンが返つてきた。

「どうもありがとう、それなら道は分かつたので大丈夫です。わたしが立ち止まっていたので心配してくださったのね。ありがとう。わたしね、このお庭でうれしそうに鳥たちが鳴き交わしているのを聴いていたの。もう春いっぱいですね」

彼女たちは一瞬びつくりしたのか黙っていたが、すぐ三人そろつて「ああ、はい」と言つた。

「ありがとう、今日は大丈夫、あなたたちに道を確かめさせていただいたから一人で帰れます。ありがとう、さようなら」

おかしなおばさんだと思つたかもしれないけれど、彼女たちも安心したように「さようなら」と言つてわたしの側を通つて行つた。

一人り歩きはたとえ近所でも（いいえ、近所だからこそ）、人様からのご親切を受けることが多い。

この他にも長い期間の工事現場の安全保安員の方が何度もわたしが通るのを覚えていくくださる。

あるとき、わたしがその現場にさしかかると、「駅へゆくのか？」と聴いてくださるので、「はい」と言うのと、「今ぼく、休み時間になるから駅まで一緒に行こう」と言ってくれました。そして、やはり親しくなつた、ご近所の方に「今からデートしてくる」と笑いながら言い、歩き出した。わたしもつられて笑つた。

不思議なことに、わたしは本当にどうにもならないほど道が分からなくなつて困り果てたことはない。もつとも夜は極力出かけないようにしている。朝は6時過ぎてからポストへ行くようにしている。この時間になると、ラジオ体操に出ていらつしやる方が増えるからだ。直接声をかけてくださらなくても、どなたかが見ていてくださる気がして安全に思えるからである。それでも二、三度同じ方が一緒に信号を渡り、ポストに投函してから、その信号を戻つて、ある一定の安全なところまで来てくださったこともある。

わたしはこの町の皆様に守られていると思う。アパート全体の防災訓練にも参加させていただいている。それはアパート全体の方にも、消防署の方にも「視覚障害者」だけでなく、いろいろな障害者を知っていたきたいからである。

役員の方には「まずご何方も自分の家族のことに心がまわるのは当然です。でも一通りそれぞれのご家庭がほつとしたときに、（そういえばあそこに避難に困る人がいた）と思ひ出していただけたら、少なくともわたしはそれで幸せです」と避難訓練のときに話せるようになった。

ありがたいことにわたしは区内の小学校へ、区内の点訳、ガイドヘルパー、手話通訳、車いす移動補助のボランティアの皆様と交じつて行かせていただけてきた。

あの2011年3月11日の東北の大震災の当日午前中に、ある小学校へ伺つていた。

14・46には我が家へ帰つていて、9階で体験していた。正直なところその揺れの中で、「ああ、これが午前中でなくてよかった、学校側はわたしの面倒も見なければならなくて大変だった」とほつとしていた。しかも偶然姉が午後から来ていたので。姉と出かけるときは何時も外で待ち合わせているのに、今日は用事があつて、我が家へ来ていたのである。その用事も終えてお茶を飲んで出かけようと、わたしは流しもとに立つたところで、茶器も出ていない、熱いお湯も扱っていなかった。

東京漢点字 学習会報告

平成27年度 第6回(第93回)報告

関 正子

わたしは片手は柱に捕まり、もう片方は姉に捉まっていたから安心できた。もし一人でいたらどんなに怖かっただろう。

まず、岡田健嗣さんが「大丈夫ですか」とお電話をくださった。

「偶然姉が来ていました」と言うと、岡田さんは「それはよかった」と言ってくれました。

そのあと兄弟はじめ何人もの友人知人から安否確認の電話をいただいた。

大震災当日に行った小学校の担任の先生に用事があった、当日から暫くして小学校に電話をし、用件を済ませてから、自然にあの日の地震についてお話ができた。先生が言った。「子供たちを避難させてみんな無事でした。避難して少しほっとしたとき、木村さんはどうしているだろうと子供たちが言ったんですよ」と教えてくださった。

「え?」、わたしはそう言ったきり、あとはなにも言えず、だんだん涙があふれ出した。

なんて優しい子供たちだろう。

このような子供たちがいる、この町全体にわたしは守られている喜びを感じている。

2016年1月3日 日曜

東京漢点字 学習会報告

平成27年度 第6回(第93回)報告

関 正子

- 1 日時 平成27年10月17日(土) 18時30分～20時30分
- 2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室
- 3 出席者(省略)
- 4 周知事項
- ・ 学習会予定 11月21日(土)、12月19日(土)、
1月29日(土)、新年会(横浜) 1月24日(日)
2月20日(土)、3月19日(土)
- 5 学習会内容
- 使用教材 漢点字 講習用テキスト 初級編第6回
- 8 複合文字(4)
- ア 前回の復習
- (62) 「**仏**」 **ブツ** **フツ** **ほとけ**
前回 // 弗 // の話に引き続き、 // ポンド、ユーロ //
の紹介。 // ポンド // は **£**、 // ユーロ // は **アルファベツ**
 トC に横線2本の形。フツ素記号は弗素で、弗が使わ
れる。
- (63) 「**僕**」 **ボク** **しもべ** **やつがれ**
 隣の形が使われている文字に、 // 相撲の撲 // // 撲
はく、ぼく //

(64) 「無^{三三三三}」 ム ブ ない なし

字式は、舞がしら／＼4つてん。無は舞う人の形。衣の袖に飾りを付けて人が舞を舞う姿を象った文字。無がもつばら「ない、なし」の意味に用いられるようになって、無に舛、せん（左右の足が外に向かつて開く形で、舞う時の足の形）を組あわせた舞が、「まう、まい」の意味に使われる。

(65) 「余^{三三三三}」 ヨ あまる あます あまり

もとの字は食偏がついていて、食べ物がたくさんあつて有り余る様子を象っていると云われる。「あまる」とは、多すぎる。能力を超えること、身に余る、目に余るなど。ヨの音は、余りのあることを表す熟語を作る。「余裕」「余力」「余震」「余命」など。

餘(余)とは別の余の字がありメスから来ている字で、このメスで膿を出したり悪い物を取り除く。治癒させる。鍼灸施術、外科手術など。

「余は満足じゃ」のように一人称のわれの意味に用いるのは仮借の用法。

イ 今回の学習

(66) 「除^{三三三三}」 ジョ ジ のぞく のける

漢点字符号はサ(1・5・6の点)とモ(2・3・4・5・6の点) こざと偏の右側に余の字が置かれた形の文字。「のぞく」とは、目の前にあるものを

外す。取り除く。「のける」とは、そこから他の場所に移して取り去る。仲間はずれにする。別の場所を取っておくこと。「魔除け」「除け者」。「ジョ」の音では「除去」「除外」「除去」「除虫菊」など。「ジ」の音では、「掃除」。また、「ジョ」は計算法の一つ割り算をさす。「加減乗除」。字式はこざと偏十余。

平成27年度 第7回(第94回)報告

関 正子

- 1 日時 平成27年11月21日(土) 18時30分～20時30分
- 2 場所 ヒューマンプラザ7階 第1会議室
- 3 出席者(省略)
- 4 学習会内容

使用教材 漢点字講習用 テキスト 初級編第6回

8 複合文字(4)

ア 前回の復習

(65) 「余^{三三三三}」 ヨ あまる あます あまり

餘は食べ物が余る状態を示し「あまる」と読む。餘るとは別の意味の余の字は、長い鍼様のもの(メスも)悪いものを取り除く、膿を出す、悪いものを外に出す意味。

こぼれ話：昔、欧州では床屋が、医術を行った。床屋の看板(正式名称は、サインポール)の三色は、赤

は動脈、青は静脈、白は包帯を表している。日本では鍼灸師が医療を行った。

(66) 「除菌」 ジョ ジ のぞく のける
目の前にあるものを外す。取り除く。 〃除去 〃除
湿 〃除菌 〃除臭 など。

イ 今回の学習

* 令とそれをパーツとして含む文字一つ

(67) 「令」 レイ(4・6の点)とロ(2・4・5の点)で表す。三角屋根の下に点、その形に片仮名のマが置かれた文字。文字の意味は、人が神の前で膝を折って神様の言葉を聞いている形を象っているといわれる。神様の言葉を聞くことから位の高い人のことを聞く「いいつけ」「みことのり」の意味を表している。神の神託や天子の「みことのり」から「おきて」の意味にも用いられる。そこから「せしむ」という訓読が生まれた。これは、漢文を訓読する際の読み方である。熟語は「法令」「命令」「詔令(天皇の命令)」「勅令(明治憲法で定めた天皇の命令)」「社交辞令」など。

令の字は、常用漢字では、〃令〃教育漢字では〃ふしつくり〃ではなく片仮名のマを使っている。

(68) 「領」 (4・6の点)と(オ2・4の

点)で表す。リヨウ

令の右側に頁が置かれた形の文字。頁は、頭に被り

物を被った形を象った文字で令と一緒に上になつて上になつて、上に立って国を治めるという意味に用いられる。〃要領〃の要は腰を、領は首筋をさし体の大切な部分の意味である。そこから〃要点〃、作業や操作のコツという意味が生じた。〃領域〃〃領土〃〃領海〃〃受領書〃〃領有〃〃大統領〃〃領袖〃(統率する者)〃首領〃(かしら)

平成27年度 第8回(第95回)報告

菅野 良之

- 1 日時 平成27年12月19日(土) 18時30分～20時30分
- 2 場所 ヒューマンプラザ7階 第2会議室
- 3 出席者(省略)
- 4 周知事項

次回開催 1月23日(土) 18時30分～ 第2会議室

5 学習会内容

(1) 前回の復習

使用教材 漢点字講習用 テキスト 初級編第6回

(67) 「令」 (4・6の点)とロ(2・4・5の点)で表す。〃刀〃の形は〃ふしづくり〃神様にひざまづいて神様の教えを聞いているさま。含む字に〃命〃などがある。

テキスト以外の熟語に〃発令〃〃辞令〃〃令室〃〃令婦人〃〃令息〃〃巧言令色〃 (29ページへ続く)

望湖楼醉書

蘇軾

黒雲 翻墨 未遮山

白雨 跳珠 乱入船

巻地風来 忽吹散

望湖楼下 水如天

蘇軾（蘇東坡）一〇三六〜一一〇一年

北宋時代を代表する詩人。東坡の号を持つ。政治家であり、書や絵画にもすぐれる。弟の蘇轍（同じく宋の官僚で文人）と共に科挙の試験に合格したが、時の政権を批判して、流罪や左遷・復帰をくり返すという、波瀾の生涯を送った。蘇軾が杭州の知事時代に築いた蘇堤は、美しく整備され西湖の遊歩道となっている。

望湖楼醉書

蘇軾

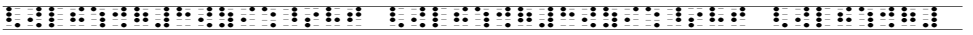
黒雲 墨を翻えして 未だ山を遮らざるに
こくうん すみをひるがえして いまだやまを
さえぎらざるに

白雨 珠を跳らせて 乱れて船に入る
はくう たまをおどらせて みだれてふねにいる
地を巻いて風来り 忽ち吹き散ずれば
ちをまいてかぜきたり たちまちふきさんずれば

望湖楼下 水 天の如し
ぼうこうろうか みず てんのごとし

望湖楼 杭州（現・浙江省杭州市）
の西湖のほとりにあつた建物。
醉書 酔いにまかせて書きつける。

にわか雨による急激な気候の変化を詠う。
黒雲に続くはげしい雨と風が去つたあと、
湖面の水は静まり、空と一つになつたかの
ようだ。



望 湖 楼 醉 書 蘇 軾

黒 雲 翻 へシテ 墨 フ 未 ダ 遮 ラ ザ

ルニ 山 フ

白 雨 跳 ラセテ 珠 フ 乱 レテ 入 ル

船 ニ

卷 イテ 地 フ 風 来 リ 忽 チ 吹 キ

散 ズレ バ

望 湖 楼 下 水如 シ 天 ノ



望湖楼下
水天の如し

参考図書『朗読してみたい 中国古典の名文』
渡辺精一（祥伝社新書）

(26ページから) (こびへつらう) “伝令” “律令”
など。

(68) 「領^{●●●●}」 令(4・6の点)と頁(おおが
いオ2・4の点)で表す。音読みにレイ、訓読みに
“くび くだり しろ えり”がある。

テキスト以外の熟語に “拝領” “首領” “占領”
“円領・盤領(まるえり)” “大領(おおくび…衣服
の前)” “総領の甚六”など。

(2) 今回の学習

使用教材 漢点字学習用 テキスト 初級編第7回

9 基本文字 (5)

1 第二基本文字(1)

第二基本文字とは二マス目に、1・2・3の点の何
れか一つが使用される。

* 「糸頭」

(1) 「幼^{●●●●}」 糸頭(イ下がり2・3の点) Ⅱ

第二糸偏)とア(1の点)で表す。字式はㄨ十力。音
読みのヨウは呉音。

テキスト以外の熟語は “幼氣(いたいけ)” “幼顔

(おさながお)” “幼心(おさなごころ)” “幼言葉

(おさなごことば)” “幼名(ようみよう、おさなな)

“幼馴染(おさななじみ)” “幼姿” “幼弧(ように

幼いみなしご)” “など。幼を含む文字に “拗(よう

飛び上がること)” “がある。

「報告と」案内



一 横浜漢点字羽化の会、発足二十周年

この一月三十一日には、本会が発足して二十年を迎
えます。

この二十年の活動の成果を挙げますならば、一つ一
つの漢点字書の完成が挙げられますが、それに加えて
その漢点字書を通して、漢点字という触読文字によつ
て、一般の書籍が、触読文字の文書として実現し得る
ということを証明したことも大きな成果と言えます。

視覚障害者が使用する文字は、指先で触れて触読で
きる文字でなければなりません。その文字は「点字」
と呼ばれて、一八二五年に、フランスの視覚障害者の
ルイ・ブライユによつて創案されました。当時彼は、
弱冠十六歳でした。

漢点字はその流れを受けて、当時大阪府立盲学校の
教諭をお務めであった故・川上泰一先生が、一九六九
年に発表されたものです。それは、漢字の構成を触読
文字である点字の体系で表そうという試みでした。

本会の活動の目的は、当初は、漢点字使用者に漢点
字の書物を提供し、また漢点字使用者を増やそうとい

うものでしたが、結果的にはその前の段階、漢点字が如何に優れた触読文字であるかということを証明することになりました。その証が活動の初頭に取り組んだ『漢字源』（藤堂明保編、学習研究社）の完成でした。全九十巻という、気の遠くなるような作業に、木下さんを中心に、会員の総力を挙げて取り組んで下さいました。

このように素晴らしい触読文字である漢点字を使用して、日本語の標準的な表記である漢字仮名交じり文を、視覚障害者の皆さんにも味わっていただきたいものと、念願しております。

なお東京漢点字羽化の会は、昨秋十周年を迎え、現在『岩波古語辞典』の漢点字訳に取り組んでおります。

これも皆、賛助会員の皆様を初めとして、多くの皆様のご支援に支えられた活動の賜です。深く御礼申し上げます。今後とも引き続き、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

二 『萬葉集釋注』

二〇一二年より、横浜市中央図書館に納入して参り

ました『萬葉集釋注』（伊藤博著、集英社）は、今年度分として第四巻の製作が急ピッチに進んでおります。四月には図書館の書架にお目見えする予定です。多くの皆様のご利用をお待ち申し上げます。

なお同書は、日本漢点字協会から、価格差保障制度の対象として販売していただいております。ご利用下さい。

本誌前号で、来年度の図書館への納入書を『古事記』とする旨申し上げましたが、万葉集のシリーズの継続性を重視して、引き続き『萬葉集釋注』第五巻を製作することに致しました。

お楽しみにお待ちしております。

三 漢点字講習会

本会では、オリジナルのテキストを使用して、漢点字の講習会を開催しております。

漢点字を学んで、漢字の世界に入ってみませんか！
人生が豊かになります。

ご遠慮なくお申し込み下さい。

横浜と東京、お近くの会場にどうぞ。

編集後記

▼羽化の会発足当時からずっと在籍している数少ない会員の1人となってしまいました。過ぎ去ってしまったえば、この20年はあつという間のような気がしますが、確実にそれだけ年をとっています▼漢点字変換ソフト、「EIBRKW(エイブルケイダブリュ)」の開発について書き出したら止めどなく文章がわき出てきそうです。幸いなことに、そのコンピュータソフトは、今でも支障なく活躍して、点字プリンターを動かしてくれています。そして、点字プリンターで打ち出した点字用紙を分厚く製本して、90巻もの製品を1年間で完成させて、中央図書館に収めたことは、思い出ししても信じられないような成果でした。それ以後毎年、何冊かの製品を図書館に納入していますが、出来栄えがちとも進歩していないのが不思議です▼岡田さんの遠大な計画には終わりがありませんが、世の中の変化は著しく、点字印刷に関するハードウェア環境が非常に厳しいものになっていきます。われわれの活動が今のままで続けられるかどうかについて、一抹の不安をぬぐうことが出来ません。

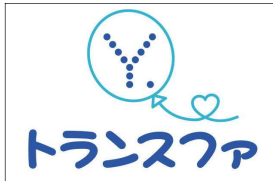
(木下 和久)

(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は7月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。